INFORMATION

コモンズフェスタ2000 11月4日からスタート!!

「LIFE—これが、私たちの生きる力!」

寺町倶楽部では毎年秋の恒例事業として、11月4日～12日、「コモンズフェスタ2000～LIFE」を開催します。

このフェスタは、應典院を舞台に、地域コミュニティの再構築を願って開催している、NPO（民間非営利組織）の合同フェスティバル。3回目を数える今回は、期間中、現代美術作家集団「アートパッキング」のメンバーたちが全フロアを利用して、誰もが気軽にアートにふれる機会を提供するなど、自己表現を通して「生」「いのち」を見つめ直す試みを展開します。

他にも、劇団「態変」のパフォーマンス、「人生」を語り合う“臨床てつがくCafe&Bar”、異性介護を考えるセッション、民族楽器コンサート、50歳以上のシニアが出演するミュージカルなど、盛りだくさんの内容です。そして締めくくりには、昨年に引き続いて「日本人の死に方大論争!」のPart2が開催されます。

さまざまな出会いから、誰もが自由にいまを問い直し、つながり合っていく……そんなきっかけに、きっとなるはず。みなさんのご参加をお待ちしています。

いのちと出会う会

2、3頁でもご報告の通り、新しい会員交流事業としてスタートした「いのちと出会う会」。

生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくり仲間と語り合う、そんな集いが「いのちと出会う会」です。

6月、7月と、新しい出会いが生まれています。

毎月第3木曜に開催しています。どなたでも参加できます。ぜひあなたもいらしてください。

第3回 9月21日（木）
「エンディングサポート ～自分らしい最期をつくりたい」
話題提供者
宝塚NPOセンター事務局長
森　綾子さん

第4回 10月19日（木）
「死別へのこころの準備」
話題提供者
大阪生と死を考える会々長
谷　荘吉さん（医師）

《いずれも……》
◎時　間：午後6時30分～
◎参加費：500円
◎会　場：應典院
お申し込みは事務局まで。

第24回寺子屋トーク お寺とNPOの協働を考える

第24回の寺子屋トークは、10月23日に決定。今回は、全国青少年教化協議会との共催で実施します。

社会の一部では、寺院がかつて担っていた教育・福祉の機能が再び見直されてきています。市民のニーズに応じて自然発生的に誕生した江戸時代の寺子屋を、世俗の価値観にとらわれない新たな教育の場として、また、地域コミュニティーの核として復活させたいとの願いから、今回の企画となりました。

基調講演には大阪女子大学助教授の吉田敦彦さん、またパネルディスカッションではパネラーとして、NPO研修センターの世古一穂さんと全国青少年教化協議会の神仁さんを加え、オルタナティブな教育の場を考えていきます。

詳細については、同封のチラシをご覧ください。

【新入会員ご紹介】

（2000年8月1日まで）

前号発行以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
日阪　敏春　大阪市鶴見区
中川　章太　吹田市
○法人会員
【香川県】
細井　俊道　高松市

サリュ VOL. 21
應典院寺町倶楽部のニューズレター

発行日　2000年8月1日（偶数月発行）
編集人　池野亮、川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

2000 AUGUST
vol.21



ひとは、ある状況やモノに対する評価・判断が、他の人と共有できていると思えるとき、自分は“ふつう”だと感じ安心するのだという。よいこと・わるいこと、きれい・きたない……自分の判断が他者と違っていたとき、ザワザワするものを感じたことはないだろうか。そして逆に、自分とは違う判断をする人がいたとき、自分にとっての“ふつう”を乱されたくなくて、排除や否定の態度をとろうとしたことはないだろうか。
“ふつう”のモノサシを固定しない、そこから何かがはじまるかも……。

EVENT REPORT

現代の生と死を見つめながら、いま「人生の棚卸し」を考えよう！

——会員交流会「いのちと出会う会」スタート！

かつてユングは40代を「人生の正午」にたとえました。知力、体力ともに充実した40代から、「小さな死」に遭遇する50代へ。その移り目こそ、人生をふりかえるにふさわしい棚卸しのときだと。

去る6月15日から、寺町倶楽部の2000年度新事業として「いのちと出会う会」がスタート。医療・宗教・福祉といったジャンルを超えて、人生をふりかえり、生きる意味を見つめようという新しい趣旨の集いです。

「生老病死」をトータルに扱いながら、現代の生と死のすがたについて考えていきます。

小さな死を乗り越える

時間と効率に追われて、自分の人生を考えるゆとりのない現代人。人生も高年期に入ると、いやおうなくさまざまな「小さな死」に出会うことになります。成人病、子どもの自立、親の老いと死、閑職への異動。高年期が「第二の思春期」と呼ばれるのは、人生の正午までにあまり経験しなかった喪失体験、つまり「小さな死」を乗り越えなくてはならないことが増えるからです。

中世ヨーロッパでは「メメント・モリ（死を想え）」といわれました。日本の中世期にも、天台の僧・源信は「往生」のイメージ（つまり地獄と極楽）を強烈に日本人の心に焼き付けました。死を意識することは、生を充実させること。私たちが「小さな死」にどう対処してきたか、人生最期の「大いなる死」で試されることでしょう。

また、死は必ずしも生体のものだけではありません。例えば「学校の死」といわれるように、戦後社会の成長を下支えしてきた教育体制がいま壊れかけています。学校だけでなく、人間関係の最後の砦たる家族もまた、不協和音を奏でています。続発する親殺し、子殺しといった陰惨な事件は、私たちに改めて20世紀の後半、日本人の価値構造となった「大きな物語の死」を突きつけているのではないでしょうか。

死にゆく患者に何を語りかけるか

新たに始まった「いのちと出会う会」は、日常の視点から生と死を見つめなおし、語りあう場。現在、寺町倶楽部の理事の一人である石黒良彦さんの提案が、発会の契機となりました。

「12年前に次男を、3年前には妻を亡くし、悲嘆のどん底にあった私を救ってくれたのが、生と死を考えるさまざまなネットワークでした。死を避けるのではなく、向き合いながら生きていくことが、人生後半の哲学になる。それこそが應典院の活動にふさわしいと思って投げかけたわけです」



「いのちと出会う会」は、毎月第3木曜日の夜、應典院で開催、ゲストを招き、前半を話題提供、後半は参加者でシェアリング（わかちあい）、そしてフリートークというスタイルで進められます。

第1回目のゲストは、枚方市で在宅ホスピスあおぞらを主宰する医師の南吉一さん。「死にゆく患者に語りかける言葉」をテーマに熱心な話し合いが続きました。

「死を目前にした人にどのような言葉がかけられるか、その問いに対し、参加者の中から真摯なこたえをいただき、私の方が教えられます。これからはヒューマンサポートの場がだいじ。現代のお寺の、新しい仏教のはじまりを感じさせますね」

と、南さん。



会場いっぱいの43名の参加者の中には、医師や医学生、福祉や宗教関係者などの顔も多くありました。会場からの発言には、家族を看取った遺族の切々たる心境を語るものもあり、人間の死とそこに寄り添う人々の悲しみや深い共感が伝わる内容となりました。

生老病死に寄り添う

第2回目は7月20日、南河内の観念寺住職・宮本直樹さんの「仏教紙芝居は心のアート」。浄土真宗本願寺派のビハーラ実践活動研究会のメンバーでもある宮本さんは手作りの紙芝居を用いて、特別養護老人ホームで毎月ユニークな法話会を開いています。

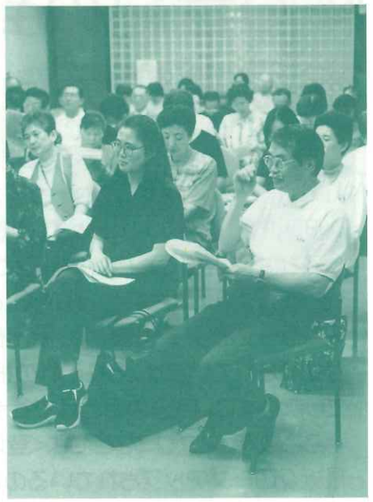
「紙芝居の布教活動というより、これをきっかけにお年寄りの心の安らぎとなれば。紙芝居の後、病室でみなさんのお話を聞かせていただくのが、何よりの楽しみです」

当日は紙芝居「くもの糸」などの実演もありましたが、僧侶として「いのち」に向き合い、同じ高さの目線で寄り添う宮本さんの真摯なすがたに、参加者から共感の声が多数ありました（参加者19名）。

ホスピスやビハーラは、もともと教会や寺院をさす言葉ですが、さらに「心身を支える、癒す」という意味もあります。本格的な長寿社会とは、同時に死と長くつきあわねばならない時代。介護保険も始まり、いま福祉ビジネスが花盛りですが、「いのち」を金儲けの対象でなく、人間関係の絆としてどうとらえるのか、現代における日本人の死生観が問われているといえます。

「支える」「癒す」も、けっして一時的なリラクゼーション（休養、くつろぎ）ではなく、人間の生老病死に寄り添い、いのちの尊厳を守りながら、ともに学び、応えあう全人的な関係をいうのではないでしょうか。

日常にある「小さな死」から目をそらすことなく、静かに関心を寄せ、体験や感情を分かちあうことが、これからの人生の実りをゆたかにしてくれるはず。



「自分の夢を語るなんてことも、いまはなかなかできない時代。いかに生きるかという、人間にとって最重要な課題を語り合う場は貴重だと思います。若い世代にも参加してもらって、いっしょに語り合うことができたらいいですね」

と、世話人の寺町倶楽部理事・名畑孝さん。

劇場寺院＝應典院で始まった「いのちと出会う会」。一直線に駆け抜けたこれまでから、少し立ち止まって、一度じっくりと人生の棚卸しをしてみませんか。

應典院こころの教室よりお願い！！

應典院では、カウンセリング事業として、こころの教室を開催しています。30～40代の女性を中心に、「箱庭療法教室」「仏教経典研究」などグループ学習の他、専門のカウンセラーによる個人面談、「子ども箱庭」「プレイセラピー」なども行っています。

ところが、いま、プレイセラピーで使用する機材が不足し、たへいん困っています。そこで、もし下記に記載の機材をお譲りいただける方がいらっしゃいましたら、ぜひご連絡いただきますようお願いいたします。

ビデオカメラ、ビデオデッキ、文字積み木、トーキングカードプレーヤー（ソニー製）、幼児用乗り物（車、バイクなど）、三輪車、トランポリン

《連絡先》

プレイセラピー担当

小川　090－4647－8228、桔梗谷　06－6624－8676

NPO世紀の到来！
市民プロデューサーのすすめ



来る2001年は“ボランティア国際年”、また、「21世紀はNPO世紀の到来」とも言われている中、『市民プロデューサーが拓くNPO世紀』(ぎょうせい刊)という本(以下、『NPO世紀』と略す)が出版されました。

これは、大阪ボランティア協会が1997年から毎年開催している「市民プロデューサー養成講座」の内容を1冊にまとめたもので、理論編・事例編・養成編という3部構成になっており、事例編には、秋田住職も含めた12人の市民プロデューサーの実践が紹介されています。それぞれの根底にあるものは「既存のシステムに組み込まれてしまわずに、自分の目と耳で社会を捉え直してみませんか」というメッセージ。

ここ数年、マスコミなどでよく登場する「NPO」という言葉の意味を確認しながら、最近クローズアップされているのはなぜなのかを考えてみたいと思います。

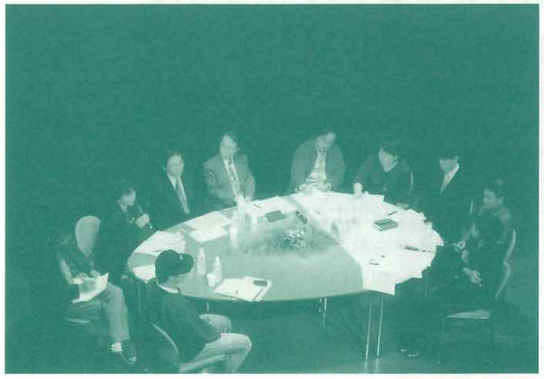
大震災が起こって「NPO」が生まれた?

'95年に起こった阪神淡路大震災。そこから突然、「NPO」という言葉が登場したり、誰もがボランティア活動をしたりするようになったと思われがちですが、実際はそうではありません。日本で最初にボランティアという言葉が使われたのは大正時代、広辞苑に初めて載ったのは'69年だとか。

「NPO」とは「Nonprofit Organization」の略で、「非営利組織」という意味です。市民(民間)の立場から公益的な活動を行う組織の総称として、アメリカで使われるようになりました。私立の学校や病院、民間の社会福祉団体、環境保護団体なども含まれており、「社会的利益(公益)のために」活動する市民(民間)団体はすべてNPOだといえます。

震災のあと、NPO法(特定非営利活動促進法)が成立するなど、NPOの役割がますます重要になってきていますが、専門家はその要因を「地球環境や市場経済など多方面での行き詰まりを人々が感じとっているから」と分析しています。

日本でも先駆的な取り組みをしてきた大阪ボランティア協会の事務局長・早瀬昇さんは、震災で得た教訓の一つとして、「行政不信とは結局、行政過信のことだ」という、行政と市民との関わり方をあげています。つまり、災害は大きければ大きいほど最初は全体像が見えないので、公平・平等を前提にしている行政に機動性がなかったのはあたり前。全体の奉仕者として不公平にならないようにするためには、全体像をつかまないと無理だからです。「何かあったら、お上がなんとかしてくれる」という私たちの意識を問い直す、そんなきっかけを震災は与えてくれたといえるでしょう。



“自発”から生まれる多様な文化

とはいっても、NPOは行政と対立するものではありませんし、「私が社会を変えるんだ!」と力んでするものでもありません。日常の暮らしの中で「あれ?」と感じたり、「こういう仕組みがあればいいな」と思ったとき、自分から一歩を踏み出してみる。それが自発的な活動のスタートです。

そうやって「私」が動き、一人ひとりの違う「私」がいろいろなことを始めることで、多彩な活動が生まれます。『NPO世紀』で紹介されている市民プロデューサーの言葉に、「自分を解放して“夢”を仕事にする」「つくり出す楽しさを身体で感じて、堂々とやる」「夢が言葉になり、言葉が意志になり、意志が行動になる」などがあります。「私」のやりたいことをやっていくと、自然に共感の輪が広がって社会システムになっていく場合もあります。たとえば、現在のホームヘルパー制度は、長野県上田市で始まった民間のボランティア活動がその原点です。

そのときに大切なことは、“自発”であるがゆえの強みと弱みを自覚しておくことだ、と早瀬さんはいいます。つまり、ほとんどが個人の善意でスタートするために、機動性がある反面、思いこみが強く視野が狭くなりがちなので、「自分のやっていることを客観的に見つめること」と「自分とは違う他者の価値観を認めること」が重要になってきます。

現実には「言うは易く、行うは難し」の感が否めませんが、一人ひとりが自分の責任で動きはじめることは、お互いを尊重し合う文化を生み出す第一歩になるのではないでしょうか。



お寺を再生する試み——コモンズフェスタ

NPOのマネジメント論で有名なアメリカのP. F. ドラッカーは、著書『非営利組織の経営』(ダイヤモンド社)の冒頭で、「いまも機能している最古の非営利機関は、日本にある。奈良の古寺がそれである。創立の当初から、それらの寺は、非政府の存在であり、自治の存在だった」と述べています。

かつてのお寺は「学び」「癒し」「楽しみ」という、大きく分けて3つの役割を担っていました。地域に根ざし、地域の人々が自発的に参加する場としてのお寺——そういったものを再生しようとする試みの一つが、毎年秋に應典院で開催されているコモンズフェスタです。



'98年に開催された第1回の企画書には、開催趣旨として次のようなメッセージが紹介されています。

——人は自由に歩きたい。自分の好きなカッコウをして、自分の好きなところを歩きたい。自分の好きなように人生を歩みたい。

現実はどうか。排気ガスを吸わずに歩きたい。でも、いつも歩く道は排気ガスにまみれている。土の上を歩きたい。でも近所には舗装道路しかない。電動車イスを使う友人と気楽に街を歩きたい。でも、行く手をはばむ階段や段差が一杯あって、危険で不便な歩き方をさせられる。

「自分に素直に生きよう」と自分に言い聞かせる。でも、まわりに合わせて世渡りしてしまう。たまに意地を張る。そんなとき、自分を少し取り戻したような気がする。それが、私の実情。

そこで、こう思った……「私もそう思う」という人と出会いたい。「そんなこと、どうでもええ」という人と出会いたい。いろんな人とワイワイガヤガヤやりながら、「それぞれの歩き方」を語り、聞き、考え、感じ合いたい。「言いだしっぺ」になってみよう——

「私」が主人公になれる場を

現代は自分らしくあることがむずかしい時代だといわれ、少し前には「自分探し」がブームになっていました。職場や学校などいろいろな場所で人々は、衝突を避けるために“やさしい人”を演じたり、ある一つの役割を演じきることに慣れてしまってはいないでしょうか。そして、その結果、「自分らしさ」とはどういうことかがわからなくなってしまった人々の増加につながったのだと思います。

3回目を数える今年のコモンズのテーマは「LIFE——これが、私たちの生きる力!」。特筆すべきはアーティストの参加が多いことです。アートの分野にもNPOが台頭し、「芸術活動は社会に必要である」というメッセージを発信しはじめています。

アーティストが自分の存在をかけて自由に自己表現をしていること、そしてそれが許される社会であることは、「ありのままのあなたでいいんだよ。自分の感性を信じていいんだよ」という力強いメッセージとなって一人ひとりに返ってくるでしょう。

自発的であること、個性を表現することは、けっして人を孤立させるものではありません。自分から動いたり表現したりすることが他者の感性に揺さぶりをかけて共振し、大きなうねりになっていくこともけっして少なくないのです。

市民プロデューサーとは、アイデアとユーモアとネットワークで新しい価値を創造する人。多くの人には見えていない可能性を、独自の感性で見抜き、表現する人。そんな人々に出会うため、また、あなた自身の可能性に気づくためにも、ぜひ「コモンズフェスタ2000」にご参加ください。

CLUB TOPICS

第23回寺子屋トーク
からだではなく、こころが痛む子どもたち あなたも手をさしのべて……

去る7月20日、関西こども文化協会との共催で、第23回寺子屋トーク「虐待・暴力が子どもの心に与える影響～教育臨床から見えるもの～」を開催しました（参加者53名）。講師は中央大学教授の横湯園子さん。横湯さんは大学での仕事と並行して、日本子どもの虐待防止研究会理事を務めるなど、臨床心理士としての活動を幅広く積極的に行っておられます。

横湯さんが虐待の問題に本格的に取り組むようになったのは、いまから約10年前。それまでは主に登校拒否の子どもたちの相談を受けていたそうですが、まだ虐待そのものが社会問題として注目されていなかったこともあって、子どもが学校に行けなくなっている原因を探るときに親の虐待を考えてみることができず、その悔しさ・無念さが現在の活動のエネルギーになっているそうです。

当日は実際の相談事例をもとにした話を中心に進められ、その中に自傷行為をくり返す男の子の話がありました。「幼いうちから長期的かつ継続的に虐待を受けてきた子どもが自傷行為を行うことがよくあります。これは、他者から見ると自己破壊でしかないのですが、本人にとっては自己保存の行為なのです。なぜなら、痛みを感じることでしか自分の生の実感を得ることができなくなってしまったからです」。

“親”という、本来なら自分を守ってくれるはずの相手から受けた暴力が子どもに及ぼす影響ははかり知れません。けれど横湯さんは、「虐待は、受けた本人にとっては確かに辛いできごとですが、いまのことではなく過去のことにしていくことができるのです」といいます。

そのために必要なものの一つが地域の子育てネットワーク。「子どもを地域で育てる」という考えに立ち、「虐待を受けた子はかわいそう」と思うだけで終わってしまうのではなく、自分にできることを考え行動を起こしていくことが、いま切実に求められています。

また、横湯さんは「人間のいかなる行動にも意味があり、意味のない行動などありえない」といい、虐待する親の側にもケアが必要だとおっしゃいます。いかなる相手であっても、その人の存在を丸ごと受け入れようとする横湯さんの姿勢に共鳴するとともに、そういう姿勢を一人ひとりがもつことが虐待をなくしていく近道なのかも知れない、と思いました。

VOICE ボイス

今回のVOICEは、三木康彰さん。三木さんは、パドマ幼稚園の現PTA会長で、今期より、倶楽部の副理事長にご就任いただきました。今後、幼稚園と倶楽部とのパイプ役として、ご活躍いただけるものと思います。



應典院の活動には、子どもが幼稚園に入園した当初より、関心を持っていました。しかし、なかなか参加できる機会がなくて、とても残念に思っていました。

今年、自分ではおこがましいとは思いながらも、パドマ幼稚園のPTA会長という大役を仰せつかりました。すると、前会長の三原さんから、「PTA会長は、應典院寺町倶楽部の理事を務めることになっている」といわれました。そんな“掟”があるなんて知りませんでしたから、少し面食らってしまいましたが、これがきっかけとなって、さまざまな活動に参加できるという期待もありました。

應典院が再建されてから、幼稚園のお母さんがさまざまな形で應典院を利用されていますよね。とりわけ、年に数回の寺子屋トークを、PTAの協賛事業として開催したり、また最近では自発的に事業を企画したりとか……。

いま、核家族化が進んで、隣近所とのつながりがうすれています。そういう意味では、幼稚園のお母さん同士はつながりやすい。子育てという共通の話題があるわけですから。幼稚園は子どもが主役の教育の場、その隣にお母さんが学び、交流する場として、應典院があることは貴重だと思います。

せっかく隣にあるわけですから、やっぱり関係を深めていきたいですね。これから、理事としていろいろな事業に参加できるのは楽しみですが、私の役割は、幼稚園と應典院の架け橋になることだと思っています。まだまだ應典院や寺町倶楽部のことを充分にご存じないお母さんが多いと思いますから。

パドマの多くのお母さん方に寺町倶楽部の会員になっていただいて、関係を深めるとともに、倶楽部が活性化していくといいですね。

秋田住職発 應典院掲示板

この7月13日に、應典院の本寺である大蓮寺の檀徒総代、扇谷謙太郎さん、小澤磯次さんのお二人が、相次いでご逝去なさいました。お二人とも、應典院再建事業の立ち上げ以来、物心両面にわたり、このお寺を応援していただいた恩人です。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

4年目に入って、いっそう痛感するのですが、應典院はけっして新奇な趣向から生まれたわけではありません。仏教の原点に立ち返り、文教の大蓮寺の伝統を継承し、いま何が都市寺院として必要なのか、延々議論して生まれた結果です。だいじなことは、現在が過去（伝統）によって、支えられているということ。このことに多くの人が、ほかにはない、應典院独自の世界の共感を呼び起こしてくれます。

たくさんの人の思いを重ねて生まれた應典院。扇谷さん、小澤さんのあたたかいご理解とご期待に背くことなく、これからも精進していきたいものです。南無。

■浄土宗基本構想会議に参加

伝統仏教の教団でも改革化の運動が起こりつつありますが、大蓮寺や應典院の所属する浄土宗でも、21世紀の教団ビジョンを描く基本構想会議が発足、恐れ多いことにその10人のメンバーの最若手として参画することになりました。

現在の浄土宗のトップは元佛教大学学長の水谷幸正師。その時代を読む確かさと経営センスは、宗教界でも随一の逸材といわれる方。その水谷宗務総長のブレーンとして、教団構想の末端にかかわることになります。とはいえ、どこかの団体を代表しているわけではありませんので、ごく自然体で、もっぱら應典院で経験したこと、考えたことをお伝えしていこうと思っています。

■秋田住職の新著刊行！

昨年秋に講演した市民プロデューサー養成講座の再録が、『NPO世紀』という本にまとまりました。大阪ボランティア協会で、同じシリーズで講演された、ピースボートの辻元清美さん、東京シューレの奥地圭子さんらに混じって、書かせていただきました。市民社会創造の手引きとして読ませます。書店で手に取ってみてください。

また、今年3月に天王寺区PTA協議会が主催した「地域から学校について語り合おう！」のシンポジウムがブックレットになりました。文部省の寺脇研さん、京都大学大学院教授の山崎高哉さんらと語っています。こちらは非売品ですが、少しならお分けできますので、お問い合わせください。

■25霊場巡拝は難所・月輪寺へ

第7回の法然上人25霊場巡拝バスツアーを、去る5月21日に実施、京都洛北の法然寺、二尊院、さらに愛宕山中腹にある月輪寺に登嶺しました。



25霊場中もっとも難所といわれる月輪寺ですが、杖を頼りに急勾配の山道を2キロ歩きづめで、23人が無事踏破しました（全参加は36名）。山頂の眺めとお水のおいしかったこと。それにしても、完走組のうち女性16名のパワー、恐るべし！　脱帽しました。

■應典院ウォールギャラリー、スタート！

應典院をアートスペースに、を合言葉に、7月から「ウォールギャラリー」がスタートしました。應典院の壁面（ウォール）を活用したシリーズ展示会の提案で、絵画、写真、書画などジャンルは不問（立体は要相談）。企画を持ち込んでもらって、審査の上、ふわしいものであれば、スペースを無料利用できる、夢みたいなお話です。誰でも申し込めますので、問い合わせてみてください。

現代仏教の看取りの風景を特集！



もう1冊、本のご紹介を。長野県の地方紙信濃毎日新聞に、3年間連載された「仏教NOW」がまとまって、『老病死（いのち）の寺』というタイトルで川辺書林から出版されました。

日本で登場しつつあるおもしろいお寺が続々登場、日本初の永代供養墓の安穏廟で知られる新潟・妙光寺や長野・松本の「ホテラ劇場」の神宮寺、骨仏の一心寺に坊主バーも登場、まさに宗派を超えた元気なお寺の総出演となっています。

應典院は最多のページで紹介されており、「暮らし育ち学びあう場」「ノストラダムスをぶっ飛ばせ」「日本人の死に方論争」3編。また巻末には、秋田住職が発行人を務める「現代教化ファイル・葬儀特集」の寄稿文も掲載されており、應典院には格別に馴染みの深い本になっています。

アエラなどで健筆をふるう気骨のノンフィクションライター、須田治さんの労作。現代の生老病死の現場がどんな活気を生み起こしているか興味深い1冊となっています。

書店もしくは應典院カウンターでも扱っています（1700円税別）。